

# 『上杉本洛中洛外図屏風』の注文時期とその動機に関するノート —近年の戦国期畿内政治史研究の成果に学ぶ—

下川 雅弘\*

## *Rakuchū Rakugai zu* Folding Screen (Uesugi Version) : Time and Motive of its Order in Light of the Recent Warring States Period Kinai Political History Research

Masahiro SHIMOKAWA\*

### Abstract

Hideo Kuroda is currently leading research on the *Rakuchū rakugai zu* (Scenes in and around the Capital) folding screen's Uesugi version (*Uesugi bon*). Having noted that Shogun Ashikaga Yoshiteru ordered the folding screen to be given to Uesugi Kenshin, Kuroda has revealed, based on newly discovered historical material, that it was created by Kanō Eitoku on the 3<sup>rd</sup> day of the 9<sup>th</sup> month of Eiroku 8 (1565). However, without further evidence, Kuroda concludes that Yoshiteru ordered the screen from Eitoku around the end of Eiroku 7 (1564) or the beginning of Eiroku 8. Furthermore, besides noting that Yoshiteru had planned to give it to Kenshin, Kuroda does not explain Yoshiteru's motive for ordering the screen at that particular time. This study identifies the time period when Yoshiteru ordered Eitoku to create this screen during the Eiroku era and proposes possible reasons for Yoshiteru's order.

### はじめに

#### —『上杉本洛中洛外図屏風』研究の到達点と若干の疑問—

戦国時代の京都を描いた『上杉本洛中洛外図屏風』（以下、上杉本と略）は、米沢藩主の上杉家に代々伝来した名品として、数ある洛中洛外図の中でも特に知られている。『上杉年譜』に「天正二年春三月下旬、織田信長ヨリ使節到来ス、濃彩ノ屏風二隻贈ラル、一隻ハ洛陽ノ名所、一隻ハ源氏ヲ画ク、狩野源四郎貞信筆也」とあるように、後世のいくつかの編纂物において、上杉本は天正2年

（1574）3月に織田信長が上杉謙信<sup>1</sup>に贈ったもので、その作者は狩野永徳であると伝承されてきた。

ところが、上杉本に描かれているのは、天正2年より10年から30年も以前の景観であるため、これらの伝承が史実であるかどうかについて、長らく論争が繰り広げられることとなった。こうした謎に対して一定の結論を導き、現時点での上杉本研究の到達点を示しているのが、平成8年（1996）に『謎解き洛中洛外図』を著した黒田日出男氏である<sup>2</sup>。以下、多少長くなるが、黒田氏の著書に基づきながら、上杉本の研究史と氏の結論を紹介していきたい。

\*人文学部 日本文化学科

多くの美術史家たちは、卓越した芸術性の高さと、狩野永徳の「州信」印が押印されていることなどから、上杉本は30歳を過ぎた天正初年の狩野永徳筆であると、おおむね共通の解釈を示していた。ただ、かつての景観を描いている点については、京都のあるべき姿を表現しているとか、粉本の構図を転用したためといった、さまざまな説が唱えられている。

これに対して、『上杉年譜』等は近世の二次史料で信用できず、15代将軍足利義昭を追放した直後の織田信長が、上杉本のような構図を描かせるはずがないと、歴史家の立場から反論したのが今谷明氏である<sup>3</sup>。今谷氏は上杉本をきわめて写実性の高い作品と捉えた上で、描かれた構造物の精緻で網羅的な調査を行い、景観年代は天文16年(1547)7月から閏7月の間に限定できるとした。そして、上杉本はこの短い期間の中で写実的に描かれたもので、当時満4歳の狩野永徳が上杉本を描くことは不可能であると結論づけたのである。

上杉本の作者を狩野永徳ではないとする今谷説には、数多くの批判が寄せられた。まず美術史家からは、初期洛中洛外図の描写を文字通りの写実とするのは誤りで、景観年代の上限は作品の制作年代の上限になるが、景観年代の下限から制作年代を特定するのは困難であるという、原則論的な問題が指摘された<sup>4</sup>。また、今谷氏による構造物の景観年代の設定にも、いくつかの疑問が提起されていく。なかでも永禄4年(1561)3月の足利義輝御成の際に新造された冠木門が、三好筑前邸に描き込まれていることから、同構造物の景観年代の上限はこの時点であるという、建築史家の高橋康夫氏からの指摘は、最も重要な意味を持つこととなった<sup>5</sup>。つまり、上杉本の制作年代についても、同じく永禄4年3月以降となることが、明らかにされたのである。

こうした今谷説への批判を踏まえながら、新たにさまざまな問題提起を行ったのが瀬田勝哉氏である<sup>6</sup>。瀬田氏は、天文18年(1549)の細川晴元没

落で失われた武家体制の上に、三好筑前邸・松永弾正邸といった新興勢力を重ね合わせて描写する異時同図の表現が、上杉本には採用されているとの見解を示した。また、こうした新旧政治秩序の同時描写を構想(注文)しうる主体としては、13代将軍足利義輝が最有力で、上杉本の成立は、永禄4年(1561)の三好邸御成以後、永禄8年(1565)の義輝殺害以前であろうと捉え、さらに、武衛門前で闘鶏を見学する少年を、天文15年(1546)に元服した義輝と推定した。なお、上杉謙信が上杉本を入手した経緯については、永禄3年(1560)からしばらく越後などへ下向した関白近衛前久(義輝の従兄弟)が、何らかで関与しているのではないかとの仮説に触れている。

つづいて黒田日出男氏は、上杉本の注文主を足利義輝とする瀬田説について、これを支持・補強する新説を発表したのである<sup>7</sup>。黒田氏は、上杉本のような誂え物の場合、制作者である狩野永徳の創造性以上に、注文主である義輝の意向が強く反映され、また、贈答用としての注作品であれば、贈答先への意識も強く反映されることを確認した上で、大塚活美氏や水藤真氏などの研究成果を援用して、以下のような説明を展開する。正月の年始祝いに細川邸から公方邸へ向かう塗輿の行列と、これに乗る貴人に注目した大塚氏の視点を支持し<sup>8</sup>、この貴人を管領クラスの人物、すなわち、上杉謙信と推定したのである。こうした細川邸・公方邸周辺を、季節表現の定形を無視し、内裏の正月節会と一対になるよう、無理に初春の光景として描いていることなどは、公方邸とその周辺を正月の風景として寿ぎたい、注文主義輝の強い意向が働いているという。また、初期洛中洛外図の中で、上杉本には内裏関連施設の文字記載が圧倒的に多いとする水藤氏の指摘を受けて<sup>9</sup>、義輝が想定した上杉本の贈答先を、内裏に特に興味を抱いている地方大名であろうと捉え、そうした人物としては上杉謙信が最適であると推理した。

以上のように、黒田日出男氏は、足利義輝が上杉謙信に上洛をうながす政治的メッセージが込められた作品として、上杉本を位置づけた。そして、義輝が謙信(輝虎)に偏諱を与え、彼の関東管領職を認めた永禄4年こそ、謙信への祝儀の品として、義輝が狩野永徳に上杉本を注文した時期と考えられるとの仮説を、いったん提示するのである。ただし、この仮説を裏付ける史料がないとして、これを博搜する作業を続け、『謙信公御書集』に「同年(天正二年)三月、尾州織田信長、為使介佐々市兵衛遣于越府、被贈屏風一双、画工狩野源四郎貞信、入道永徳斎、永禄八年九月三日画之、花洛尽、被及書札」との記事を発見し、いったん提示した仮説を以下のように修正した。

上杉本は、足利義輝が上杉謙信に贈るために、永禄7年末か同8年初めに、狩野永徳に命じて制作させた作品で、永禄8年(1565)5月の義輝殺害後の9月3日(義輝の百箇日の2日後)に完成された。永徳の手元に残されたこの絵は、上洛を果たした織田信長に売り込まれ、武田氏攻略のため協調関係を築きたい謙信に対して、天正2年(1574)3月に信長がこの屏風を贈答した。以上が黒田日出男氏によって最終的に提示された新説で、以後、現在に至るまで、上杉本に関する定説的な位置を獲得している。

なお、この間に発表された上杉本の評価に言及している研究としては、小島道裕氏の論考が存在する<sup>10</sup>。小島氏の論考は、基本的にこれまでの研究成果を踏襲・整理したものである。この中で小島氏は、上杉本に描かれた公方邸について、12代將軍足利義晴の今出川御所ではなく、高橋康夫氏が唱えるように<sup>11</sup>、理想化された本来あるべき花の御所の姿と捉え、その内部に3名の従者とともに描かれた人物を、足利義輝と推定した。その上で小島氏は、空想の花の御所に住み、すでに滅んでしまった死者たちを従え、来ることのない上杉謙信を待つ義輝を描いた上杉本は、現実の姿を肯定でき

ない義輝が、願望や現実逃避に走った「敗北宣言」と見なさざるを得ない絵で、政治的な事物については、同時代的な正確さは担保されていないと結論づけた。こうした評価への違和感については、本論で触れることとする。

さて、現時点での上杉本研究の到達点といえる黒田日出男氏の定説に戻るが、これにも若干の疑問が2つ存在する。たしかに、『謙信公御書集』の記事により、上杉本が足利義輝殺害後の永禄8年(1565)9月3日に、狩野永徳によって完成されたという事実は、揺るぎないものとなった。また、上杉本の注文主についても、これを義輝とする黒田説(瀬田説)以上の想定は困難である<sup>12</sup>。けれども、義輝による上杉本の注文時期については、特に根拠を示さないまま、「永禄七年(一五六四)年末か同8年初めに、若き狩野源四郎(永徳)に命じて制作させていたもの」と断じている。おそらくこれは、制作に要する期間などから逆算しての想定と考えられるが、瀬田勝哉氏が上杉本の成立時期を永禄4年から8年の間と推定し、黒田氏も当初の仮説では永禄4年の注文と捉えていたように、義輝による注文時期(永徳による制作開始時期)については、永禄4年3月の三好邸御成まで遡り得ることを視野に入れて、再検討すべきと考える。

もう1つの疑問は、永禄7年末か同8年初めに、義輝が謙信に屏風を贈らなければならなかった政治的背景について、何ら触れられていない点である。注文時期を永禄4年とする当初の仮説では、謙信の関東管領就任への祝儀としてという明確な説明がなされていたが、その妥当性も含めて、義輝が謙信に贈答するための屏風を、永徳に注文した直接的な動機についても、当時の政治情勢を踏まえて考察する必要がある。

黒田説が提唱されて以降、戦国期の畿内政治史研究は大幅に進展している。本稿では、これらの成果に学びながら、黒田説に対する2つの若干の疑問について検討を試み、気づいたことを覚え書

きとして整理しておきたい。

## 1. 描かれた新旧2つの政治秩序

本論に入る前に、天文末年から永禄初年頃までの、京都周辺の政治情勢に触れておく。天文17年(1548)12月、三好長慶が主君である細川晴元を裏切り、翌年6月の江口の戦いに勝利して、細川氏綱とともに上洛したため、晴元は足利義晴・義輝父子とともに近江へ逃亡した。その後、一時的に長慶と義輝は和睦するものの、やがて両者の関係が破綻して、天文22年(1553)8月に義輝が再び逃亡すると、長慶は將軍を擁立しない体制をしばらく維持することとなる。

永禄元年(1558)、足利義輝が挙兵し三好長慶との合戦を繰り返すものの、11月に六角義賢の仲介により再び和睦して帰京すると、12月には長慶・細川藤賢(氏綱の弟)・伊勢貞孝などを従えて妙覚寺に移った。永禄2年4月には、義輝の帰京を祝して上杉謙信が上洛し、6月、裏書免・塗輿免といった足利一族や管領家に準じる待遇を与えられた。謙信の義輝などとの接近は、三好方からするとできるだけ阻止しておきたかったと考えられるが、同月には謙信と関白近衛前久(義輝の従兄弟)が盟約を結んでいる。10月に謙信が帰国の途につくと、翌年9月に前久は越後に下向し、謙信の関東出兵に協力しようとした。謙信は北条氏の小田原城を包囲した後、永禄4年閏3月に上杉憲政から上杉家の家督を譲られ、4月には鶴岡八幡宮で関東管領就任式が行われた。さらに、12月になると義輝から偏諱を受けて、正式に関東管領職が追認されたと考えられている。ただ、謙信による関東平定が思うように進まなくなると、前久は謙信の意向を無視して、翌年8月に帰京した。

一方、この間の足利義輝と三好方との関係であるが、永禄3年(1560)1月に三好長慶が義輝から相伴衆に列せられ、正親町天皇から修理大夫に、子の三好義興が筑前守に任じられると、この頃から

長慶は家督を義興に事実上譲与していった。2月には義興と三好家臣の松永久秀が、義輝によってともに御供衆に加えられた。永禄4年1月、義興は上洛して相伴衆就任の礼を述べており、2月には義興・久秀が義輝の強い意向で御紋を拝領している。以上のように、永禄初年における義輝は、三好方の諸氏に対してさまざまな栄典を授与することで、少なくとも表向きは三好方との協調姿勢を示していた。こうした義輝からの栄典等に対する返礼の意味を含めて、永禄4年3月に義輝の三好邸への御成が実現することとなったのである。

さて、先述したように、上杉本には天文18年(1549)以前の政治秩序の上に、三好筑前邸・松永弾正邸といった新興の対立勢力が意識的に描写されていることが、瀬田勝哉氏によって明らかにされた<sup>13)</sup>。ここでいう上杉本に描かれた天文18年以前の政治秩序とは、同年6月の江口の戦いの敗北によって没落した細川京兆邸の細川晴元、細川典厩邸の細川晴賢、細川和泉守護邸の細川元常、薬師寺備後邸の薬師寺備後、高畠甚九郎邸の高畠甚九郎を指しており、ここではおおむね今谷明氏の理解が踏襲されている<sup>14)</sup>。

なお、伊勢守邸の伊勢貞孝は、細川晴元が足利義晴・義輝父子とともに逃亡した後、やがて新興の三好方に転じて在京し続けるので、没落した勢力ではないが、天文初年より政所執事として義晴に仕えており、天文18年以前の政治秩序を構成する要素として描かれているとの理解も可能であろう。また、瀬田氏によって、義輝の近衛御所の前身である武衛(斯波邸)の門前に、幼少期の義輝自身が描かれているとの推定がなされているが、こうした理解に従えば、この場面も天文18年以前の光景の一部となる。

上杉本に描かれた武家勢力のうち、以上が天文18年以前の旧政治秩序と捉えられるのに対し、新興の政治秩序を表現したものとして捉えられてきたのが、三好義興の三好筑前邸と、松永久秀の松

永弾正邸である。このうち三好筑前邸が、上杉本の制作年代の上限を示す重要な構造物であることは先述した。そこで、上限年代の決め手ともなった永禄4年(1561)3月の足利義輝による三好筑前邸への御成について、田中信司氏の研究成果に拠りながら検討していきたい<sup>15</sup>。

永禄4年3月3日、御成について内々の打診を受けた三好方は、いったんこれを固辞するものの、大館輝氏・上野信孝・伊勢貞孝ら足利義輝側近からの勧めにより、結局は了承することとなった。3月30日、賓客側の義輝は、細川藤賢・松永久秀・伊勢貞孝らを御供衆として従えて、三好筑前邸に御成した。接待側の三好方は、三好義興・細川氏綱・三好長慶らが、將軍とともに饗応にあずかる相伴衆として、義輝に対座している。

再びここで上杉本を観察すると、三好義興の三好筑前邸、松永久秀の松永弾正邸だけでなく、細川氏綱の細川京兆邸<sup>16</sup>、細川藤賢の細川典厩邸<sup>17</sup>、伊勢貞孝の伊勢守邸といった、義輝の三好邸御成における賓客側・接待側の主要人物の邸宅が、永禄4年での新政治秩序として描き込まれているのである。上杉本の細川京兆邸・細川典厩邸および伊勢守邸は、天文18年以前の旧政治秩序を構成する要素であると同時に、永禄4年の新政治秩序を構成するダブル・イメージとして描かれているとも解釈できよう。

天野忠幸氏は、永禄4年の三好邸御成の意義について、義輝にとっては、三好方を幕府の政治秩序に組み入れ、主従関係を再確認すること、三好方にとっては、義興が盛大な饗宴を催すことによって、自身の勢力を誇示することが、それぞれの目的であったと指摘している<sup>18</sup>。永禄4年頃までの義輝と三好方は、互いに腹の中では強烈な対抗意識を抱きながら、義輝による三好方への栄典授与(それ自体が対抗意識でもあろうが)や御成要請からうかがえる通り、義輝は三好方との協調姿勢を、表向きは積極的に示す方針を採用していた。上杉本に

描かれた新政治秩序は、そうした永禄4年頃における両者の表面的な協調関係を、表現しているように感じられる。

## 2. 永禄4・5年の軍事的混乱と描かれた伊勢守邸の検討

足利義輝による上杉本の注文時期とその動機について、黒田日出男氏の当初の仮説では、上杉謙信が関東管領に就任した永禄4年(1561)12月から同5年春頃に、祝儀の品の1つとして絵師に発注されたのではないかと推測されていた<sup>19</sup>。この仮説について、黒田氏自身はすぐに取り下げしてしまうのであるが、その妥当性を再検討する必要はあるだろう。そこでまずは、永禄4・5年における京都周辺の政治情勢を確認しておきたい。

永禄4年7月、反三好方の畠山高政が紀伊から和泉に攻め入ると、これに呼応して近江の六角義賢も反三好方の兵を挙げた。義賢は翌年にかけて京都東山に在陣し、三好方と対峙する。永禄5年3月に、高政が和泉久米田で三好方に勝利すると、三好義興は足利義輝と慶寿院(義輝の母で近衛前久の叔母)を八幡に退去させてその護衛を命じ、入れ替わりで六角方が京都を占拠した。5月になって三好方が反撃に転じ、河内教興寺で畠山方に勝利すると、6月には義賢が三好方と和睦して近江に引き上げ、義輝が帰京を果たす。

さて、永禄4・5年における軍事的混乱については、足利義輝が三好方と行動をともにしていたため、反三好方の六角義賢・畠山高政と、義輝を擁した三好方との戦いという構図で捉えられることが多い。三好長慶に強い対抗意識を抱く義輝の内心を思えば、彼が反三好方としての動向を示しても不思議はないのであるが、現実には義輝が反三好方と結んだことを示す直接的な史料は、管見の限りでは存在しない。永禄4・5年においても、義輝は三好方との表面的な協調関係を、永禄初年以來一貫して維持していたようである。

ここで足利義輝による上杉本の注文時期と動機の話題に戻ろう。義輝から上杉謙信への贈答品が、関東管領就任への単なる祝儀の品であれば、黒田日出男氏の当初の仮説のように、永禄4年12月から翌5年春にかけての時期に、義輝がこれを贈ろうとしたと考えても特に問題はない。けれども、上杉本が謙信の上洛を要請するという強い政治的メッセージを込めた屏風であることを考えると、もし永禄4・5年に義輝がこれを贈ろうとしていたのであれば、それはあまりに危険な三好方への背信行為を、彼が密かに計画していたことになる。

こうした推測も完全には否定しきれないので、義輝が以上のような動機で、永禄4・5年に上杉本を注文した可能性についても保留しておくが、この時期における注文を想定するのは、これを裏付ける証拠もなく、たしかに無理があろう。また、上杉本の完成が、永禄8年9月であることに疑いはなく、永禄4・5年にこれを注文していたのであれば、仮にこの間の軍事的混乱による屏風制作の中断などがあつたと想定しても、完成に至るまでの年月の長さには、やはり違和感を抱かざるを得ない。そこで、上杉本の注文時期について、本稿では少なくとも永禄4・5年の軍事的混乱が終息して以降であろうとの仮説に基づいて、考察を進めることとしたい。

ところで、永禄4・5年の軍事的混乱は、6月の三好方と六角方との和睦で終息した訳ではなかった。永禄5年(1562)8月、伊勢貞孝・貞良父子が突如兵を挙げたのである。この事件は、9月に三好義興・松永久秀により、伊勢父子が討伐されて終息するものの、政所頭人として長らく京都で存在感を示してきた伊勢氏の挙兵・滅亡は、幕府に少なからぬ衝撃を与えた。伊勢氏の遺臣たちは、貞孝嫡孫への本宗家相続を求める嘆願書を幕府に提出したが、義輝はこれを許可せず<sup>20</sup>、さらに、伊勢貞孝を「御敵」としてその所領を没収の上、側近の細川藤孝らに配分し<sup>21</sup>、同じく側近の摂津晴門を新しい政所頭人に起用している。

伊勢貞孝挙兵の理由については、これまでさまざまな見解が示されていて<sup>22</sup>、必ずしも定説を見ないが、彼の反乱以前より、伊勢氏の主導する政所沙汰に対して、足利義輝が介入する姿勢を強めていたと推断した山田康弘氏の見解を前提に<sup>23</sup>、義輝が貞孝を追いつめたという文脈で、この事件を理解する傾向が強い。たとえば、松村正人氏は、政所頭人として幕府権力から遊離し続けた貞孝を、最終的に義輝が排除したと捉え<sup>24</sup>、天野忠幸氏は、伊勢氏の排除と政所の掌握を企てた義輝が、三好長慶と貞孝を離間させた上で、彼を挙兵に追い込み、松永久秀らに討たせたのではないかと推測した<sup>25</sup>。反乱鎮圧後の義輝が、伊勢氏への厳しい処分を認め、側近の摂津晴門を政所頭人に据えていることなども、これらの説を支持する根拠となっている。

再び上杉本に話題に戻すと、ここに伊勢守邸が描かれていたことを思い出す。もし足利義輝が伊勢貞孝を追いつめて滅亡させたとするならば、義輝によって注文され、貞孝の反乱より後の永禄8年(1565)に完成した上杉本(おそらく注文も貞孝の反乱以降であろう)に、なぜ義輝は伊勢守邸を描かせたのかという疑問が生じてくる<sup>26</sup>。そもそも貞孝を滅亡に追いやった主体として、義輝を想定することは妥当なのであろうか。

足利義輝が三好方によって八幡に匿われ、六角方が京都を占拠していた永禄5年(1562)3月から6月にかけて、伊勢貞孝は京都に留まり、六角方による徳政実施などに協力していた<sup>27</sup>。そのため、六角方が三好方と和睦すると、貞孝は彼らとともに近江坂本へ退去している。その後の8月に貞孝は挙兵するのであるが、その直接的な理由については、「將軍義輝も三好氏とともに(八幡に)逃れるなか、貞孝は在京を守り、恐らくはこのために(三好氏との関係を壊し)滅亡したのである」という大西泰正氏の見解が<sup>28</sup>、もっとも事実に近いものとする。六角方に味方した貞孝は、三好方と六角方との和睦

後に、京都における自らの立場を完全に失い、政所頭人をも罷免されて<sup>29</sup>、やむなく拳兵に至ったのであろう。

さて、永禄5年に六角方と行動をともにしたのは、伊勢貞孝だけではなかった。教興寺合戦前後の情報を伝える大館晴光書状案に<sup>30</sup>、「大覚寺殿、越前へ可有御下向為、坂本へ御越候、伊勢守父子、坂本へ被相退候、其外奉公方、京都ニ相残衆、大略坂本へ相越候」とあり、足利義輝の伯父である大覚寺義俊(近衛前久の叔父でもある)もまた、貞孝父子などととも近江坂本へ逃れていた。義俊が六角方に与していたことは明らかである。また、『大覚寺門跡略記』に「永禄五年五月、避京都乱、居江西志賀津、又徒北海敦賀津」とあることによって、義俊が坂本から志賀津・敦賀津を経て越前に向かったことも分かり、8月には朝倉義景のもとに身を寄せている<sup>31</sup>。

永禄4・5年の軍事的混乱の最中に、足利義輝が大覚寺義俊と内通していたことを示す証拠は見当たらないが、三好方からすれば、義輝が六角方と直接的な関係を結ぶ可能性は、十分に危惧されたと思われる。永禄5年3月の義輝と三好方による八幡への退去は、義輝自身の主体的な意志によるものではなく、かつて長江正一氏が述べているように、「将軍が六角氏の手落ちるのを防ぐため」という<sup>32</sup>、三好方の思惑に導かれての行動であったと考える。義輝だけでなく、義輝の母で義俊の妹でもある慶寿院(近衛家出身で義輝の後見人)が、三好方によって八幡へ退去させられていることも、この間の政治情勢を示している。

以上のように、永禄4・5年において、表面上は三好方との協調関係を維持することに努めていた義輝であるが、内心ではやはり義俊や伊勢貞孝と通じていたと考えるのが自然であろう。天野忠幸氏は、永禄5年における六角方としての義俊の行動から、「教興寺の戦いによって、長慶は畠山高政や六角承禎(義賢)に勝利したが、本当の敵は将

軍義輝であったことを思い知る」と解釈している<sup>33</sup>。

では今一度、永禄4・5年における足利義輝と伊勢貞孝の関係について整理したい。伊勢氏が頭人として決裁する政所沙汰に対し、義輝が介入する姿勢を強めていたという山田康弘氏の説は、竹内門跡と北野松梅院との相論をおもな事例として立論されたものである<sup>34</sup>。この相論に義輝が介入しようとした事実は、たしかに認められるものの、これをどこまで普遍化できるかについては、再検討の余地はあろう<sup>35</sup>。本稿のここまでの考察を踏まえるならば、少なくとも必要以上に義輝と貞孝を対立的に描くべきではないと判断したい。

ルイス・フロイスは、永禄5年(1562)にヴェレラが公方邸を訪問する場面において、「はなはだ高貴であり、公方様自身の後見人を務め、公方様から大いに畏敬され寵愛されている伊勢守殿」と書き残しているが<sup>36</sup>、ここに表現されている義輝と貞孝の関係性こそ、より実態に近い姿であったと考える。

とはいえ伊勢貞孝は、三好方と反三好方との抗争の中で自身の立場を失い、やがて拳兵するに及んだ。足利義輝が三好長慶によって、天文末年から長らく京都を追われた際も、貞孝には義輝を見捨てた過去がある。この一件を含めて、永禄5年に反乱を起こした貞孝に対し、義輝の心中には複雑な思いが去来したことであろう。反乱鎮圧後の義輝による伊勢氏の処分には、たしかに厳しささえ感じられる。けれども、こうした処分については三好方に主導権があり、義輝が三好方との当面の協調関係を維持するためには、伊勢氏の処分を認めざるを得ない側面が強かったのではなからうか。

以上のように考えると、義輝が注文した上杉本に、伊勢守邸が描かれていることについても、特段の違和感は抱かなくなる。むしろ、先行する東博模本の伊勢守邸に比べて、上杉本ではこれがはるかに控えめに描かれていることに、義輝の心情が表現されているようにも感じられるのである。

### 3. 永禄6年以降の義輝の動向と上杉本注文の時期・動機

永禄4・5年の軍事的混乱の最中、足利義輝は反三好方と心を通わせていたにもかかわらず、それでもなお表面的には三好方との協調関係を維持していた。こうしたことから前章では、上杉謙信の上洛を促すメッセージを込めた屏風を、義輝がこの時期に注文する可能性は低いとの結論に至った。そこで本章では、永禄6年(1563)以降における義輝の動向を確認しながら、彼が上杉本を注文するのふさわしい時期と動機に迫っていく。

ところで、上杉本では本国寺・妙顕寺・妙覚寺・本能寺といった法華宗寺院が<sup>37</sup>、大きく細部にわたって描かれており、これらに対する親近感がうかがえると、瀬田勝哉氏は分析している<sup>38</sup>。河内将芳氏は、法華宗寺院のこうした描かれ方について、狩野永徳が妙覚寺の有力檀徒であったことに加え、当時の京都における法華宗の繁栄を、現実のものとして描いているのであろうと推測する<sup>39</sup>。この妙覚寺については、永禄元年(1558)に帰京を果たした足利義輝が、仮御所として1年半ほど滞在した寺院でもあった。

永禄初年までの法華宗は、教義の対立が存在し、門流ごとに活動していたが、永禄4年(1561)の六角方による京都侵攻への対応から、結合体成立の気運が高まっていく。これに関東における法華宗諸派の融和の流れが、永禄6年頃から加わって、松永久秀や三好方諸氏の調停と保障により、永禄7年8月に京都で永禄の規約という諸派の和談が結ばれた<sup>40</sup>。永禄の規約の成立に重要な役割を果たした久秀は熱心な法華信徒で、本国寺の大檀越でもあった。

永禄6年閏12月、足利義輝は本国寺を門跡寺院に格上げするよう、朝廷に申請した。これを実際に要望したのは松永久秀である。同年には本国寺と清水寺との山論に久秀が介入し、本国寺が勝訴するという出来事があった。本国寺の門跡成は、

山門の強い反対で結局は成功しなかったが、ここに久秀の法華宗(本国寺)に対する強い思い入れと、久秀に同調する義輝の姿勢を確認することができよう。上杉本に描かれた本国寺では、特別な行事・儀式が行われている。本国寺がことさら大きく、詳細に描かれていることについて、瀬田勝哉氏は、「(義輝が久秀の)存在を後ろに意識したものであったようにも思われる」と、その印象を語った。また、上杉本が松永弾正邸の正月の光景を、三好筑前邸以上に寿いで描いている点についても、同様の解釈を示している<sup>41</sup>。

では、足利義輝がこれほど松永久秀を気遣っているのには、どのような理由が存在するのであろうか。田中信司氏は、永禄4年の義輝による三好筑前邸御成において、久秀は三好家臣であると同時に、義輝の御供衆としての所作を忠実にこなしており<sup>42</sup>、永禄年間前半における久秀の京都政局への関わり方は、義輝の意図に近い志向性を示していたと分析している。また、永禄6年に義輝の娘が、久秀への人質として大和に downward という出来事については<sup>43</sup>、従来は両者の対立関係を示すものとして理解されてきたが、現実には両者の強固な結びつきを示す象徴と見なせると解釈し、さらに、久秀は三好家臣でありながら、義輝や公家勢力の立場に近く、幕府が京都で機能している状態を、むしろ「あるべき姿」として認識していたと推定する<sup>44</sup>。

また、村井祐樹氏も、松永久秀は当初三好長慶の内者として、訴訟などの取次を担当する奉行的な存在であったが、永禄年間には畿内の諸勢力との関係を深め、相論において独自の裁定を下すようになったことを明らかにした<sup>45</sup>。その上で、「(久秀は)大和国の領主であるとともにまた三好殿の家臣にあたり、知識、賢明さ、統治能力において秀でた人物で、法華宗の宗徒である。彼は老人で、経験にも富んでいたため、天下すなわち「都の君主国」においては、彼が絶対命令を下す以外何事も行われぬ有様であった」と書き残したルイス・フロイスの

記事について<sup>46</sup>、永禄6・7年頃における京都周辺の政治情勢や、実像としての久秀をよく伝えているのではないかと理解を示している。

永禄6年前後には京都の統治者として強大な権力を誇りながら、御供衆として幕府に親近感を寄せる松永久秀のことを、足利義輝が気遣うのには以上のような事情があったと考えられる。上杉本における本国寺や松永弾正邸から判断する限り、そこには永禄6・7年頃の光景が描かれているとの印象が強くなる。

さて、永禄6・7年は三好方にとって、大変慌ただしい時期であった。永禄6年8月、三好長慶の子の義興が病没する。閏12月には松永久秀の子の久通が、松永氏の家督を譲られた。翌7年(1564)1月、義興の死により長慶の養子となった三好義継(長慶の甥)は、久通らとともに上洛して足利義輝と対面する。6月には義継が三好氏の家督を相続した御礼として、再び久通らを率いて上洛し、義輝に謁見している。そして、7月には長慶が死去し、それは長らく秘匿された。永禄6年後半から7年前半にかけての三好方の世代交代は、義輝にとって三好方との協調関係を解消する契機となったのではなからうか。

こうした状況の中、三好義継・松永久通らは、突如として足利義輝の近衛御所を襲撃し、義輝だけでなく、慶寿院(義輝の母)、鹿苑寺周嵩(義輝の弟)らを殺害した。永禄8年(1565)5月のことである。かつては義輝殺害の首謀者とされることの多かった松永久秀について、事件当時、久秀は大和に在国して足利義昭の保護を図っており、義輝を討つのに積極的であったのは子の松永久通であろうと、天野忠幸氏は述べている<sup>47</sup>。

ところで、三好方による足利義輝殺害の理由については諸説あるが、史料的制約もあって必ずしも定説はない。山田康弘氏は、永禄7年頃の三好方の動揺に際して、彼らは將軍擁立体制から自立するか、統制下に置きやすい人物を新將軍に据え

るかの選択に迫られたため、義澄系足利氏の義輝一族を滅ぼし、義植系足利氏を擁立することで、2つの將軍家の統一と政治の安定化を図ろうとしたのではないかと考察している<sup>48</sup>。また、天野忠幸氏は、勢力回復を目指す義輝に対して、三好方が先手を打ったとしてもおかしくないとの理解を示した<sup>49</sup>。義澄系足利氏の族滅によって、三好方が政治的主導権の維持を目指す前提には、永禄6・7年の三好方の世代交代を契機として、反三好方と手を結び権力の集中を図ろうとする義輝の動きが存在したのであろう。

こうした足利義輝と反三好方との連携を間接的に示す史料として、義輝殺害翌月の永禄8年6月24日に、畠山方の安見宗房が上杉方の河田長親・直江景綱に宛てた書状が存在する<sup>50</sup>。まずこの書状では、「仍 公方様、去五月十九日、三好・松永以下以所行、被召 御腹候、先代未聞之仕合、無是非次第候、天下諸侍御主二候処、三好仕様無念之儀候、善悪被申合、御甲矢被仕度覚悟候」と、三好義継・松永久通による義輝殺害を報じた上で、義輝のことを「天下諸侍御主」と表現し、義輝の甲い合戦への覚悟を上杉謙信に求めている。これに続けて、「於様躰者、従 大御門跡様可被入仰候間、此度、其 御屋形様於御上洛者、天下御再興、可為御名誉候、南方之儀者、此方屋形并同名新次郎被相催候、可被及行候、越州、若州、尾州、其外国々之儀者、従 大御門跡様被仰調由候間、定而其方へも可為御入魂候」と、北条方(南方)との和睦交渉はこちらで取り計らうこと、朝倉・若狭武田・織田等の諸氏については大覚寺義俊(大御門跡様)が調略することを提示し、謙信の上洛による天下再興を強く要請した。ここで初めて、反三好方による謙信上洛への期待が、直接的に表明されるのであるが、これが殺害以前の義輝の意志とも共通していたとは考えられないだろうか。

そこで、上記書状の差出所である安見宗房と、

反三好方の結集に向けて諸氏へ働きかけるとされた大覚寺義俊について、まずは彼らの行動を追っていく。足利義輝殺害以前の宗房は、永禄5年(1562)3月5日、河田長親・直江景綱に書状を宛てて、義輝により上杉謙信の関東管領職が認められたことに対し、祝儀の品を進献すると伝えている<sup>51</sup>。また、この2日後の3月7日には、近衛植家(前久の父)も謙信に書状を宛てており、近衛前久の在国に対して謝意を伝えている<sup>52</sup>。これらの日付に注目すると、久米田合戦で畠山方が三好方に勝利したのが3月5日、それを受けて六角方が京都を占拠したのが3月7日であり、彼らは何らかの共通する思惑をもって、上杉方と接触した可能性もあろう。なお、前久は同年8月に東国より帰京し、翌永禄6年3月26日と8月11日に、在国中の御礼と帰京への佞言を、書状で上杉方に伝えている<sup>53</sup>。

つぎに近衛一族の大覚寺義俊(近衛植家の子で前久の叔父)であるが<sup>54</sup>、天文末年には上杉謙信宛の足利義輝御内書とともに、義俊も書状を発しており、すでに両者の仲介役を果たしていた<sup>55</sup>。その後の義俊の動向については、先述の通り、永禄5年5月の教興寺合戦で畠山方が三好方に敗北したため、彼は近江坂本に退却の後、8月には越前の朝倉氏のもとに身を寄せている。永禄8年(1565)6月16日に、足利義輝殺害の第一報を上杉方に伝えたのは朝倉景連らで、同時に謙信の上洛をも勧めているが<sup>56</sup>、これに義俊が関与していたかどうかは不明である。同年8月5日には、謙信宛の足利義昭御内書に義俊が副状を発し、義昭周辺の現況報告と謙信の上洛要請を行っている<sup>57</sup>。翌永禄9年3月10日、義昭は謙信に宛てた御内書で、謙信と北条氏康との和睦を斡旋し、義俊をその仲介役としている<sup>58</sup>。また、同日の謙信宛の義俊条書には、「相州之事、是非共被和与、参洛肝要之事」とあり、義昭や義俊が、謙信に上洛を要請する前提として、氏康との和睦を強く提案していたことが分かる<sup>59</sup>。

こうした上杉謙信に対する北条氏康との和睦勧奨は、すでに足利義輝も行っていた。永禄7年(1564)5月13日に、義輝は謙信宛の御内書で、「氏康与数年及銚桶之段、不可然之趣、对輝虎申遣之条、各加分別、令和睦之様、馳走肝要候」と、氏康との和睦を強く求めている<sup>60</sup>。ところが、同年8月4日、謙信は東国の情勢等を理由に、氏康との和睦は困難である旨、義輝に返信してきたのである<sup>61</sup>。これに対して義輝は、翌永禄8年3月23日に、「北条左京大夫氏康与和睦事、去年差下藤安申遣之处、内存被聞召訖、雖然、急度可遂其節事、簡要候、為其对氏康差下使節申越候間、其以前於及行者、不可然候」と、謙信に氏康との和睦を再度要請している<sup>62</sup>。

以上のように、足利義輝には少なくとも永禄7年の段階で、上杉謙信上洛に向けた環境整備の一環として、謙信と北条氏康との和睦を勧奨していた可能性はあろう。であるならば、義輝による上杉本の注文時期についても、永禄6年後半に三好方の世代交代が始まる時期から、義輝に和睦を求める御内書を発した永禄7年5月に至る間か、遅くとも謙信より和睦の受け入れは困難との返信を受けた同年8月からほどない頃に、これへの対応として屏風の贈答を企図したのではないかと推定したい。

#### 4. 描かれた公方邸と足利義輝の意図

上杉本の注文時期と推定した永禄6年後半から7年後半にかけて、足利義輝の居所は、武衛(斯波邸)の跡地に新しく造営し、永禄3年(1560)6月に完成した近衛御所であった。けれども、上杉本に近衛御所は描かれず、かつてこの地にあった武衛が、幼少期の義輝自身とともに、天文18年(1549)以前の光景の一部として描かれている。では、描かれなかった永禄6・7年頃の近衛御所は、実際にはどのような姿であったのか。

『足利季世記』には、「永禄七年冬ノ初メヨリ、京公方室町殿御殿御造作アリ、摂州上下郡エ棟

別課役カカリ、一家ニ金子二歩ツツ可出ト責ラルル、奉行人ハ進藤ト松永主殿助ト聞エシ、乱後ノ大営ナレハ、畿内迷惑大カタナラス」と、足利義輝が永禄7年後半に御殿の建造を始めたことが記されている<sup>63</sup>。二次史料の叙述であるため、そのままには信用できないが、山科言継が永禄7年12月に義輝を訪ねた際、「武家御見舞、御作事、御庭の造等見物」と書き残しており<sup>64</sup>、近衛御所では何らかの工事が行われていたようである。また、醍醐寺理性院の厳助は、永禄6年のこととして、「公方様御所、旧冬より大堀を構え用心」と記録している<sup>65</sup>。『厳助往年記』が日次記をもととした年代記であることから考えると、永禄6年は8年の誤りの可能性もあろう。もしそうであるならば、近衛御所では永禄7年後半から用心として大堀が築造されていたことになる。ルイス・フロイスも、「(永禄八年)正月、(中略)公方様の宮殿は深い溝で囲まれており、それには広く良くしつらえられた木橋がかかっていた」と、近衛御所が堀で囲まれていた様子を叙述している<sup>66</sup>。永禄6年後半から次第に権力の集中を図ろうとする義輝の動きに対して、三好方も反撃の姿勢を示していたのであろう。義輝による近衛御所の大堀築造は、三好方への備えであったと考えられる。

上杉本の注文時期に関する本稿の推定が正しいとすれば、屏風の制作が進行している頃、近衛御所は城郭化を遂げたことになる。けれども、義輝は上杉本にあえてそうした近衛御所の姿を描かせず、花の御所の旧地付近に壮麗な「公方様」を配置させた。こうした公方邸の描かせ方には、義輝のどのような意図が込められているのであろうか。

足利義晴(義輝の父)の公方邸である今出川御所は、史料上では永禄元年(1558)までしかその存在が確認できず<sup>67</sup>、永禄6・7年にはすでに存在しなかったと考えるのが自然である。従来、上杉本に描かれた公方邸は、義晴の今出川御所で、それは同時に花の御所であると解釈されることが多かったが、高橋康夫氏は、今出川御所=花の御所では

く、さらに、描かれた公方邸=今出川御所でもないとした上で、描かれた公方邸=理想化された過去の花の御所であると捉え、絵師の視線は当代ではなく、はるかな過去に向いていると評価した<sup>68</sup>。また、小島道裕氏も、描かれた公方邸は、義晴の今出川御所ではなく、事実を描いたものでもないと解釈している<sup>69</sup>。

描かれた公方邸が、天文18年(1549)以前の旧政治秩序を構成する一部としての、義晴の今出川御所を意識した表現である可能性も、まったくないとは言いきれないが、現実には存在しない花の御所と、そこに向かう上杉謙信の一行を、画面に配置させているという捉え方には、特に異論はない。ただし、謙信一行の出発点となっている細川京兆邸(および細川典厩邸)の解釈については、ここで詳しく検討しておきたい。

高橋康夫氏は、歴博甲本・東博模本・上杉本のいずれもが、ほとんど同じ姿の細川邸を定型的に描いていることについて、これが事実を表現しているのか、たんに同じ粉本を採用しただけであるのか判然としないとする<sup>70</sup>。小島道裕氏は、細川京兆邸と細川典厩邸が並んで描かれる構図が、歴博甲本以来変わらないことを確認した上で、細川京兆邸は10年以上も前から当主がいいため、荒廃あるいはすでに消滅していたと推測し、上杉本は正面に当主を描かないことで、細川氏の不在を表現していると解釈した<sup>71</sup>。また、細川典厩邸も同様の状態であったはずであるとした上で、にもかかわらず当主らしき人物を描いているのは事実ではなく、不自然で現実離れた印象を抱くとしている。

ところが、細川邸は細川勝元から昭元の時代まで、一貫して同じ位置に存在し、初期洛中洛外図の上京の中心に共通して細川邸が描かれるのは、戦国期の実態に即した構図であったことが、小谷量子氏によって近年明らかにされた<sup>72</sup>。上杉本が制作された時期に即しても、永禄8年(1565)2月にルイス・フロイスが、在京のキリシタンたちに京都

周辺の名所を案内される場面で、「キリシタンらは司祭や修道士たちを細川殿の御殿に導いた。細川殿は都の市街がある山城の国の本来の国主である。しかし彼およびその祖先は、数年来戦争において不運であり、細川殿は追放されたので、その御殿は破損していた。だがその庭園は日本の古い物語や文献の中で大いに賛美され、今なお往事を偲ばせるに足るものを大部分残していた」と書き記している<sup>73</sup>。

細川京兆家当主の細川氏綱は、永禄2年(1559)8月に、三好長慶によって山城淀城に移され、永禄6年12月に同所で死去している。けれども、永禄8年においても間違いなくそこに存在し、かつ当主が不在となって久しいため、名所と化した細川京兆邸の現実の姿が、上杉本にはある程度忠実に描かれているのである。また、同時期における細川典厩邸の状況は不明であるが、この頃の京都周辺の諸史料に、当主である細川藤賢の在京と、足利義輝の御供衆として活動する彼の姿が散見され、ここが藤賢の邸宅として現実に使用されていても不思議はない<sup>74</sup>。上杉本の細川典厩邸に、当主らしき人物が描かれていることも、実際的な表現として読解することは可能であろう。なお、三好筑前邸に人物を配置せず、松永弾正邸を賑やかに描いているのも、永禄7年頃の両者に対する足利義輝の内心を、現実に反映した表現と捉えられる。

歴博甲本・東博模本・上杉本において、細川京兆邸と細川典厩邸が共通する構図で描かれたのは、高橋康夫氏が指摘するような粉本の利用があったとしても、それは粉本の転用によってもたらされた単純な結果ではなく、少なくとも上杉本に関する限り、そこに現実に即した光景を描こうとする意識と、注文主である足利義輝の何らかの意図が存在していたからではなからうか<sup>75</sup>。

上杉謙信の行列が目指している公方邸は、たしかに理想化された空想の花の御所として描かれていよう。高橋康夫氏は、この公方邸をかつての花

の御所と捉え、絵師の視線は過去を向いていると評価したが、これは概念化された過去の花の御所ではなく、足利義輝と謙信が手を結ぶことで再建を目指す、幕府の新たな政治体制を象徴した、近未来の花の御所であると考えられる。

はじめにで紹介した通り、小島道裕氏は「上杉本は、足利義輝が自らの現実の姿を肯定することができず、願望や現実逃避に走った絵であり、本人はそうは思っていなかっただろうが、義輝の「敗北宣言」とみなさざるを得ない」との解釈を示している<sup>76</sup>。けれども、上洛を上杉謙信が了承するまでは、交渉を諦めない覚悟の義輝は、現実を見据えながらも将来を見通す構図として、すでに当主を失った実在の細川京兆邸(ここでは管領邸という意味が含まれていよう)を出発し、近未来の幕府としての花の御所に向かう謙信の姿を、狩野永徳に描かせた。そこには理想の幕府を再建したいという義輝の強烈な意気込みと、謙信の上洛を懇望する彼の熱烈な政治的メッセージが込められているのである。

## おわりに

足利義輝による上杉本の注文時期(狩野永徳による制作開始時期)とその動機、および屏風の構図に込められている義輝の思いを、本稿の結論として最後に整理しておく。

永禄6年(1563)後半から三好方の世代交代が始まると、これを好機と捉えた足利義輝は、上杉謙信の力を借りて新たな政治秩序の構築を目指そうとする。義輝は謙信の上洛を要請するために、自身の思いを込めた屏風の制作を、狩野永徳に命じたのである。その時期は、早ければ三好義興が死去した永禄6年8月以降で、義輝が謙信に御内書を宛てた永禄7年5月より以前か、遅くとも義輝が謙信からの返書を受け取った8月の直後が、妥当であろうと推定した。

また、足利義輝は、異時同図の手法によって、屏風の中で自身の思いを立体的に描かせてい

る(後掲【別表】参照)。まずは細川京兆(晴元)邸・細川典厩(晴賢)邸・細川和泉守護邸・薬師寺備後邸・高畠甚九郎邸・伊勢守邸を、天文18年(1549)以前の旧政治秩序として配置し、武衛の門前には少年義輝の姿を書き入れることで、父である足利義晴と彼を支えた武将たち、さらには幼少期の自身を懐古している。つぎに細川京兆(氏綱)邸・細川典厩(藤賢)邸・伊勢守邸・三好筑前邸・松永弾正邸といった三好邸御成の主要構成員の邸宅を、永禄4年(1561)前後における新政治秩序として配置し、永禄初年から目指してきた三好方との表向きの協調関係をも、少し前の出来事として振り返る。こうした新旧2つの過去に加え、義輝が再建を目指す理想の幕府として、近未来の花の御所の姿を写し出し、実在の細川京兆邸から構想中の新しい幕府へ向かう上杉謙信の行列を描き込むことで、現実から将来を展望する義輝の熱意と、謙信上洛

への期待を表現するのである。

本稿の考察結果は以上であるが、上杉本が永禄4・5年頃に注文された可能性については、必ずしも払拭できたわけではない。足利義輝が反三好方の諸勢力と広範に連携することで、三好方に対抗しようとの野心を、永禄4・5年頃に抱いていたことが証明されれば、上杉謙信の上洛を要請するための屏風を注文する動機は、すでにその時点でも存在したことになるからである。もとより上杉本の注文主を義輝とする説は、黒田日出男氏(もとは瀬田勝哉氏)の推定であるので、これを前提として戦国期畿内政治史を叙述することは許されない。永禄元年(1558)の三好方との和睦以降における義輝が、三好方・反三好方の双方とどのような政治的関係を構築しようとしていたのかについては、帰京後の彼の思考や行動の分析とともに、より詳細な検討が必要であろう。

	天文18年以前の旧政治秩序 (幼少期の懐古)	永禄4年前後の新政治秩序 (現実と将来展望)	現在(永禄7年頃)と近未来 (協調関係の追想)
公方邸	-	-	○〈理想〉
武衛(斯波邸)	○(幼少期の義輝)	-	-
近衛御所	-	-	-
細川京兆邸	○(晴元)	○(氏綱)	○〈不在〉
細川典厩邸	○(晴賢)	○(藤賢)	○(藤賢)
細川和泉守護邸	○	-	-
薬師寺備後邸	○	-	-
高畠甚九郎邸	○	-	-
伊勢守邸	○	○	-
三好筑前邸	-	○	○〈閑散〉
松永弾正邸	-	○	○〈繁栄〉

【別表】

## 注

- (1) 上杉謙信の人名表記について、本稿では謙信で統一する。また、狩野永徳・足利義昭・足利義輝・近衛前久・三好義興・六角義賢・三好義継・直江景綱等についても、同様に人名表記を統一する。
- (2) 黒田日出男『謎解き洛中洛外図』（岩波書店、1996年）。
- (3) 今谷明『京都・一五四七年』（平凡社、2003年〔初版1988年〕）。
- (4) こうした美術史家からの批判については、奥平俊六『ミヤコの残像』（『洛中洛外図と南蛮図屏風』小学館、1991年）に詳しく整理されている。
- (5) 高橋康夫『洛中洛外』（平凡社、1988年）。
- (6) 瀬田勝哉『増補 洛中洛外の群像』（平凡社、2009年〔初版1994年〕）。
- (7) 注(2)前掲黒田著書。
- (8) 大塚活美「輿に乗る貴人」（『日本史研究』322、1989年）。
- (9) 水藤真『絵画・木札・石造物に中世を読む』（吉川弘文館、1994年）。
- (10) 小島道裕『描かれた戦国の京都』（吉川弘文館、2009年）。
- (11) 高橋康夫「描かれた京都」（『中世都市研究』12、2006年）。
- (12) 上杉本の注文主については、黒田氏が検討した足利義輝・足利義昭・織田信長以外に、上杉謙信と交流のあった近衛前久をはじめとする近衛家出身者、謙信の上洛を要請する反三好方の武家勢力、幕臣としての松永久秀など（これらの人物については、本論で触れていく）も、想定可能と考えている。ただし、検討の経過は省略するが、いずれも義輝に比べると注文主である蓋然性は低く、本稿では注文主は義輝であるとの説を前提として、議論を展開していく。
- (13) 注(6)前掲瀬田著書。
- (14) 注(3)前掲今谷著書。
- (15) 田中信司「御供衆としての松永久秀」（『日本歴史』729、2009年）。
- (16) 細川氏綱は永禄2年8月に、三好長慶によって山城淀城に移されており、永禄4年の時点で、細川京兆邸に当主が常住することはなかった。ただし、同じ頃、三好義興は摂津芥川山城、松永久秀は大和信貴山城を本拠としており、三好筑前邸や松永弾正邸についても、ある程度同様のことが指摘できよう。
- (17) 細川氏綱の弟で細川典厩家当主である細川藤賢は、永禄8年に足利義輝が殺害されるまで、たびたび京都周辺の諸史料にその名が記載されており、御供衆として在京することが多かったと考えられる。
- (18) 天野忠幸『三好長慶』（ミネルヴァ書房、2014年）。
- (19) 注(2)前掲黒田著書。
- (20) 『蝸川家文書』「伊勢貞孝遺臣等同家再興嘆願條書案」（『大日本古文書 家わけ21-3』所収794）。
- (21) 『一色家古文書』「室町幕府奉行人奉書案」永禄5年9月15日（『室町幕府文書集成 下』所収3887）。
- (22) 伊勢貞孝挙兵の理由に関する諸説については、高梨真行「永禄政変後の室町幕府政所と摂津晴門・伊勢貞興の動向」（『MUSEUM』592、2004年）に詳しい。
- (23) 山田康弘『戦国期室町幕府と将軍』（吉川弘文館、2000年）。
- (24) 松村正人「室町幕府政所頭人伊勢貞孝」（『白山史学』35、1999年）。
- (25) 注(18)前掲天野著書。
- (26) もちろん天文18年以前の政治秩序を構成する要素として、伊勢守邸を描いているだけとの解釈も成り立つであろうが、上杉本を注文

- したのと近い時期に、自らの意志で滅亡に迫りやった人物の邸宅を、あえてそこに描かせていることには、多少なりとも違和感を抱かざるを得ない。
- (27) 今谷明『戦国期の室町幕府』（講談社、2006年〔初版1975年、角川書店〕）、高梨真行「戦国期室町将軍と門跡」（『中世の寺院と都市・権力』山川出版社、2007年）などを参照。
- (28) 大西泰正「戦国期政所頭人伊勢氏をめぐって」（『桃山歴史・地理』42、2007年）。
- (29) 政所頭人の後任に側近の摂津晴門を推したのは足利義輝と考えられるが、伊勢貞孝の罷免そのものは、義輝以上に三好方の意向によるものと推測しておきたい。
- (30) 『大館記』「大館晴光書状案」（永禄5年）5月27日（『ビブリア』83所収）。
- (31) 注(27)前掲高梨論文、川嶋将生「大覚寺義俊の活動」（『室町文化論考』法政大学出版局、2008年）などを参照。
- (32) 長江正一『三好長慶』（吉川弘文館、1968年）。
- (33) 注(18)前掲天野著書。なお、永禄4・5年の軍事的混乱における足利義輝の立場について、注(32)前掲長江著書や、今谷明『戦国三好一族』（洋泉社、2007年〔初版1985年、新人物往来社〕）では、義輝が反三好方に加担していたといった文脈で叙述されている。また、小谷利明「畿内戦国期守護と室町幕府」（『日本史研究』510、2005年）では、永禄4・5年の三好方と反三好方との抗争が「幕府を分裂させた天下の戦争」と捉えられており、また、畠山方の安見宗房が、永禄5年3月に上杉方と音信していたことが紹介されている（後述）。永禄4・5年の軍事的混乱において、義輝が反三好方とどのような関係を有していたのか、反三好方の軍事行動がどの程度広範に展開する可能性を秘めていたのかについては、より詳細な検討が必要であると考えている。
- (34) 注(23)前掲山田著書。
- (35) この点については、注(33)の検討事項と合わせて、今後の課題としたい。
- (36) 『フロイス日本史3』「司祭(ヴィレラ)がふたたびひび公方様を訪れ、そして都から堺の市へ伝道に赴いた次第」。
- (37) 当時の法華宗(日蓮法華宗)については、日蓮正宗大石寺の岡田信績氏から、貴重なご意見をうかがった。
- (38) 注(6)前掲瀬田著書。
- (39) 河内将芳『日蓮宗と戦国京都』（淡交社、2013年）。
- (40) 天野忠幸「三好氏と戦国期の法華宗教団」（『市大日本史』13、2010年）。
- (41) 注(6)前掲瀬田著書。
- (42) 注(15)前掲田中論文。
- (43) 『言継卿記』永禄6年3月19日条。
- (44) 田中信司「松永久秀と京都政局」（『青山史学』26、2008年）。
- (45) 村井祐樹「松永弾正再考」（『遙かなる中世』21、2006年）。
- (46) 『フロイス日本史3』「本年(一五六四年)および前年に、都地方で生じた幾つかのことについて」。
- (47) 注(18)前掲天野著書。なお、事件前後を含め、永禄年間における足利義輝と松永久秀との関係性については、あらためて検討してみたい。
- (48) 山田康弘「将軍義輝殺害事件に関する一考察」（『戦国史研究』43、2002年）。
- (49) 注(18)前掲天野著書。
- (50) 『長岡市立科学博物館所蔵文書』「安見宗房書状」（永禄8年）6月24日（『上越市史別編1』所収462）。
- (51) 『上杉家文書』「安見宗房書状」（永禄5年）

- 3月5日(『上越市史 別編1』所収311)、注(33)前掲小谷論文。
- (52)『上杉家文書』「近衛植家書状」(永禄5年)3月7日(『上越市史 別編1』所収312)。
- (53)『上杉家文書』「近衛前久書状」(永禄6年)3月26日・8月11日(『上越市史 別編1』所収337・347)。
- (54)義俊の行動や役割については、高梨真行「將軍足利義輝の側近衆」(『立正史学』84、1998年)、注(27)前掲高梨論文に詳しい。
- (55)『上杉家文書』「大覚寺門跡義俊書状」(天文19年)2月28日、(天文21年)5月24日・25日・26日等(『上越市史 別編1』所収30・63・65・73等)。
- (56)『上杉家文書』「朝倉景連書状」等(永禄8年)6月16日(『上越市史 別編1』所収459・460)。
- (57)『上杉家文書』「大覚寺義俊副状」(永禄8年)8月5日(『上越市史 別編1』所収468)。
- (58)『上杉家文書』「足利義昭御内書」(永禄9年)3月10日(『上越市史 別編1』所収493)。
- (59)『謙信公御書集』「大覚寺義俊条書」(永禄9年)3月10日(『上越市史 別編1』所収496)。
- (60)『上杉家文書』「足利義輝御内書」(永禄7年)5月13日(『上越市史 別編1』所収406)。
- (61)『謙信公御書集』「上杉謙信書状」永禄7年8月4日(『上越市史 別編1』所収429)。
- (62)『上杉家文書』「足利義輝御内書」(永禄8年)3月23日(『上越市史 別編1』所収454)。
- (63)『足利季世記』「冬康生害之事」。
- (64)『言継卿記』永禄7年12月16日条。
- (65)『巖助往年記』永禄6年2月4日条。
- (66)『フロイス日本史3』「司祭(フロイス)が都に到着した後、そこで生じたこと」。
- (67)注(6)前掲瀬田著書。
- (68)注(11)前掲高橋論文。
- (69)注(10)前掲小島著書。
- (70)注(11)前掲高橋論文。
- (71)注(10)前掲小島著書。
- (72)小谷量子「戦国期細川邸近辺の空間構造」(『戦国史研究』68、2014年)。
- (73)『フロイス日本史3』「都の市街、およびその周辺にある見るべきものについて」。
- (74)『言継卿記』永禄12年3月3日条に、「細川右馬頭庭之藤戸石、織弾三四千人にて引之」とあり、その後も京都に屋敷を構えていたことはたしかである。
- (75)上杉本にも粉本等の構図を転用して描いただけの場面は多く存在しようが、足利義輝の上杉謙信に対する政治的メッセージが込められた作品であることを考えると、武家の邸宅といった政治的な構造物については、義輝の何らかの意図が描かれているのではないかという眼を持って、これを読解すべきであろう。
- (76)注(10)前掲小島著書。

## 付記

本稿は、平成26年11月13日の駒沢女子大学大学院仏教文化専攻仏教文化研究会において報告した、「『上杉本洛中洛外図屏風』の制作開始時期に関する若干の疑問－近年の戦国期畿内政治史研究との接点を求めて－」、および、平成25年10月から平成26年3月まで全6回にわたって担当した、2013年後期いなぎICカレッジプロフェッサー講座「屏風絵というタイムマシーン－洛中洛外図による戦国の都案内－」の内容の一部をもとに、これを論文化したものである。どちらの機会にも多くの貴重なご意見を頂戴した。記して感謝申し上げたい。